報告四

南スーダンの紛争後社会における混成的秩序

：強制移動民の生活世界と「ものごとの国家的秩序」

橋本栄莉

1　はじめに

こんにちは。立教大学の橋本です。本日はよろしくお願いします。わたしの専門は文化人類学で、二〇〇八年から、南スーダンで断続的にフィールドワークをしてきました。ご存じのように南スーダンは政情不安で、わたし自身、さまざまな人道的危機と言われる状況に直面してきました。本日はその経験の一部を紹介したいと思います。発表の前半では南スーダンの国内避難民、後半では、ウガンダに暮らす難民となった人々について取り上げます。

その前に、まず今回のシンポジウムのテーマである人権、あるいはそれとかかわる開発支援に対するわたし自身の立場と、関連する研究の背景について述べておこうと思います。文化人類学には開発人類学、または開発の人類学という分野もあり、現地の開発に積極的に関与していこうという立場と、それとは距離をとろうとする立場とがあります。どちらかというとわたしは後者の立場です。その理由は色々とあるのですが、次に引用する文章に共感を覚えるというのがそのひとつです。

「持続可能性」は、次世代の人類やそれ以外の存在が住みよい地球へと歩みを進めていくための夢である。こ

の語はまた、破壊的な活動を覆い隠すためにも使われ、そちらの方こそが一般的になってしまっていることが、わたしを笑わせ、また、泣かせるのだ[Tsing 2017, p.51]。

今日のわたしたちにとって、「開発」を否定したり、その概念を無意味であるとして退けたりすることは実質的に不可能である。それは例えば一九世紀における「文明」の概念や、一二世紀における「神」の概念を拒否するようなものである[ファーガソン 二〇二〇、二一頁]。

これらの指摘は、現行の開発や人道支援に対する極めて強い訴えかけであるように聞こえます。今の南スーダンやアフリカの惨状は、一九～二〇世紀にかけての西欧社会による秩序構築の負の遺産でもあり、当時の文明観や人権観は、今もなお影響力を持っています。では、危機的状況において、人々はどのように自らの秩序を構築しようとしているのだろうか、というのが今回の問いになります。

近年の開発支援とかかわる人類学的研究では、例えば人道支援が既存の社会関係の崩壊や新たな分断を生むことや、政治的に中立であるはずの開発支援が、結局行政を介して現地社会に入っていくことで、地域の貧困の原因でもある国家体制を強化してしまう副作用が明らかにされてきました。つまり、人を助けたい、良かれと思ってなされてきた支援が、結果として逆効果になってしまうということです。

一方、難民をはじめとする強制移動民のミクロな活動に目を向ける人類学的難民研究では、国際社会が提供する一般的な難民像――つまり、「脆弱」で「受動的」な国家外存在のこと――を「国際難民レジーム」として批判的に検討してきました。例えば、難民キャンプは、難民のネガティブなイメージを創造し、難民を知と介入の対象とする人工的な場・装置であります。そして、国家内存在としての人間の姿こそが「自然であるべき状態」で、難民は治癒されるべき社会的病理であるという考え方――これを、人類学者のリーサ・マルッキは「ものごとの国家的秩序」[Malkki 1995]と呼びましたが――、この「ものごとの国家的秩序」を正常なものとして疑わない立場を人類学は否定してきたわけです。

この観点から、難民と呼ばれる人々の歴史性、多様性、自律性、能動性、創造性に注目する人類学的研究が多数生まれています。ここで注意しなければならないのは、難民の自立性、能動性について指摘することは、支援をする必要がないといっているのではないということです。強制移動民が自律的で創造的だという指摘は、国際難民レジームのもとで見えなくなっている難民の実態があり、それこそがさらなる窮状を生み出しうるということを示すためにな

されるべきとわたしは考えています。そこで今回の発表では、今述べた問題意識を受け継ぎ、国内避難民や難民といった強制移動民が形成する「秩序」のありかたや、国際社会が想定する「秩序」、すなわち「ものごとの国家的秩序」からのずれに着目します。具体的には、（1）支援のない国内避難民キャンプにおける人々の相互扶助、（2）難民の自治組織の機能と共同性をとりあげ、彼らのミクロな「秩序」がどのように構成されるかを見ていきたいと思います。

2　調査地の概要と研究方法

さて、南スーダンという国は、いわゆる「脆弱国家ランキング」の常に上位にいる国で、一般的に考えられる「秩序」から著しく外れる状態にある国とみられています。国家としては二〇一一年に独立しましたが、二〇一三年末に首都ジュバで激しい武力衝突が生じて以降、多くの人々が難民となって国外に居住しています。わたしはヌエルという牧畜民の間で調査を行ってきました。ヌエルは文化人類学では、首長がおらずとも集団の秩序を維持できるという「秩序ある無政府状態」または「無頭社会」として知られている、牛に至上の価値を置く牧畜民です [Evans-Pritchard 1940]。ヌエル社会は、ひとつの民族集団としてのアイデンティティや凝集性を持たず、ひじょうに伸縮性に富んだ流動的な集団間関係を形成していました。しかし、その後歴史的状況の中で民族間関係は変化していきました。

民族集団間関係にとって大きな転換点となったのが、イギリスによる植民地統治の際の境界設定と第二次スーダン内戦時の南部勢力の内部対立です。植民地統治期の「分割と統治」の政策は、当時の植民地行政がアフリカの「無秩序」を制圧するためのものでした。一九三〇年代、ヌエルと隣接するディンカという民族集団の間には境界線が引かれ、この境界に沿った強制移動と定住化が植民地行政によって進められました。その後、スーダンが独立する直前から第一次スーダン内戦（一九五五―一九七二）が始まり、長い内戦期に突入します。第二次スーダン内戦期（一九八三―二〇〇五）には、南部勢力において内部対立が発生し、対立した党派の司令官らによって人々のエスニック・アイデンティティは操作・利用されました。これにより、内戦時の党派対立は、ヌエルとディンカの間の凄惨な「民族紛争」と化しました。たびたびの平和構築の試みにもかかわらず、ヌエルとディンカの間の民族間関係は現代に至るまで解決しないままとなっています。二〇一三年末以降の武力衝突でも同様に、政治的な対立が一部「民族紛争」と化してしまいました。

今回の発表で取り上げるのは、南スーダン独立直後（二〇一一年）に村落部で生じた武力衝突で発生した国内避難民の間の相互扶助と、「南スーダン内戦」と表現されることもある二〇一三年末以降の武力衝突によって発生した難民による自治のありかたです。二つの武力衝突の規模や対立構造は異なっています。前者は一部地域における民族集団間の対立であるのに対し、後者は国家全体を巻き込み内戦化しました。しかし、いずれの危機的状況下においても、ヌエルの人々が形成する秩序の在り方には共通点が見いだされたというのが今回指摘したい点です。

3　国内避難民キャンプにおける相互扶助

みなさんは「ハゲワシと少女」[1]という写真をご存じでしょうか。この写真は、おそらくヌエルの人が写ったもののなかでもっとも有名なものかと思います。わたしが二〇一三年に訪れたのは、まさにこの写真が撮られたアヨッドという町でした。この地は古くからヌエルの居住区の中では、耕作が可能という点で比較的豊かな場所とされてきました。ほかのヌエルの人々が暮らす地域が水はけの悪い土壌で湿地帯が多いのに対し、アヨッドは砂地が表出している土地もあり、穀物を育てることが可能です。また、同じ理由で飛行機やヘリコプターも発着しやすく、緊急支援が入りやすい土地でもあります。

しかし、わたしがこの地を訪れた時もまた、飢えの気配が立ち込めていました。当時、アヨッドには紛争による国内避難民のためのキャンプが設置されていました。国内避難民（Internal Displaced Persons, IDPs）は、難民に比べてあまり知られていない用語ですが、簡単に言えば、「国境を越えていない難民」のことです。国内避難民は、特に南スーダンにおいては、難民よりもより深刻な状況下にある人々として知られています。難民が国境を超える経済力や体力、人脈がある人々であるのに対し、国内避難民の多くは、国境を超える力のない老人や病人、女性子どもが多く含まれています。

南スーダン独立後、村落部では武力衝突が激化していました。なかでも、ヌエルの下位集団の一つであるロウ・ヌエルと、隣接する民族集団ムルレの間では、牛や婦女子の略奪を目的としたレイディング（raiding）が凄惨化し、もはやかつてのレイディングではなく互いの集団の殲滅を目指すものにまで変化していました。こうした地域紛争の変化には、過去の内戦や時の政治軍事情勢が深く関係しています。この中で、ロウ・ヌエルの非戦闘員たちは、隣接するヌエルの下位集団、ガーワル・ヌエルの居住地である

アヨッドに避難していました。ロウ・ヌエルとガーワル・ヌエルは、互いに同じヌエル語を話し、親族・姻族関係を持つ場合も少なくありません。しかし、同じヌエルであっても、次に述べる状況の中でホスト―ゲスト関係は変化していきました。

わたしが訪れた国内避難民キャンプは一年以上、食糧支援がありませんでした。では、支援のないキャンプで人々がどのように生き延び、またどのように貧困がうみだされたのかを調査に基づき考えてみたいと思います。

アヨッドのキャンプには、開設当初は五〇〇名程度の国内避難民が居住していましたが、わたしが訪れた開設一年後には五〇〇〇人以上にもなっており、もはやパンク状態でした。食糧支援をはじめとする様々な支援はすでに断たれていた状態にもかかわらず、キャンプの存在を聞きつけた者たちは何かを期待してこの土地に多く集まってきていました。アヨッドに集まった人々の中には、紛争による避難民のみならず、村落部で貧しい生活を送っている人たちも多く含まれていました。ＮＧＯによって建設されたシェルターに入りきらない人々は、シェルターのまわりに小屋を建てて暮らしていました。

わたしは設置された七二のシェルターの世帯調査を行い、そのうち一〇世帯をピックアップして、その世帯のフードダイアリーをつけ、毎日何を食べ、それらの食糧をどこでどのように手に入れたのかを確認していきました。食糧支援がないため、国内避難民の人々の食糧の多くは狩猟採集と物乞いにより得たものでした。狩猟採集により、人々は野生のナツメヤシや野生のヤム芋、魚、木の実など実に様々な食糧を手に入れていました。野生のナツメヤシは、過去の内戦時にも多くの人々の生を繋いできました[2]。野生のナツメヤシ、木の実の類は平時でも食されますが、一方、野生のヤム芋は非常時しか食べません。調理に手間がかかり、味もよくないのです。野生のヤム芋が食されているということは、当然かもしれませんが、やはり人々は普段よりも困窮していた生活を余儀なくされていたことがうかがえます。

多くの国内避難民が主食としていたのは、ヌエルの伝統的な酒、ソルガムでビールを作る工程ででる酒粕でした。ビールは若者よりも年配の人たちが好みます。内戦などで夫を亡くした寡婦は自家製ビールの販売を生業としていることが多いです。キャンプの近くには、地元の女性たちがビールを売っている酒場があります。ここは個人的に、一日いても飽きない場所でした。というのも、ビール一杯をめぐって、ビール売りの女性たちと国内避難民の人々のあいだで様々な駆け引きが行われるからです。国内避難民の

多くはビールを購入する現金を持っていません。では、なぜ多くの国内避難民がここに集まっているのでしょうか。酒場に集まる者の多くは年配男性です。彼らは、ビール売りの女性たちに面白い話や歌を披露したり、また通りすがりの地元の人に話しかけたりして、どうにか一杯のビールをおごってもらおうとしていました。ビール売りの女性たちも、彼らとのやり取りを楽しんでおり、実際に話が面白かった時には一杯ごちそうしていました。後で述べるように、ここでのやり取りは、国内避難民の生存戦略にとっても極めて重要なものとなります。では、食糧獲得戦略と相互扶助の事例をいくつか見ていきたいと思います。

〔事例1　キャンプ内に多くの親族を持つ国内避難民〕

Ndさんはキャンプ内に多くの親族・姻族を持っています。彼女は、自分が狩猟採集によって得た野生のナツメヤシを親族・姻族内の様々な人に配っています。そしてその返礼として、魚や野生のヤム芋を得ていました。さらに聞くと、返礼の野生のヤム芋も、ヤム芋の送り主が別の親族より得たものでした。そのヤム芋を、Ndさんはさらに別の親族に与えていました。

国内避難民のフードダイアリーを付けていく中で、人々が狩猟採集で得た食糧はキャンプ内の親族を循環していることが見えてきました。多くの避難民たちは、キャンプ内の自らの親族集団を利用して食糧を得ていたことが見えてきました。それもそのはずで、シェルターをすべて回り、各シェルターに祖先集団を聞いていくと、いくつかの出自集団に分かれていました。つまり、キャンプ全体が一個の大きな親族と表現してもよいほど、キャンプ内の結びつきは強いものでした。

ほか、特に主食である酒粕の獲得において、国内避難民は地元住民との関係を構築していることが見えてきました。Nkさんの戦略を取り上げましょう。

〔事例2　酒粕の獲得戦略〕

Nkさんはキャンプでは有名な「酔っ払い」の年配女性です。Nkさんは朝から酒場を徘徊し、モロコシビール売りの女性たちに面白い話をしたり、歌を歌ったりすることで、一杯二杯のビールを無料で提供してもらうことがあります。Nkさんはモロコシビール売りの女性たちと友人関係を築き、酒粕を得る努力をしているのです。ビール売りの女性から酒粕を分け与えてもらうことを他の国内避難民キャンプの住人に知られないよう、酒粕を取りに行くときには細心の注意を払います。Nkさんの夫は、木材をビール売りの女性に与えたり、時にはその女性の家囲いを修理

することもあります。これにより、Ｎｋさんの世帯は、その女性の酒粕をほとんど一人占めすることができるようになります。実際にＮｋさんのフードダイアリーからは、彼女の世帯は二日に一回はモロコシビールや酒粕を食していることがわかりました。

酒粕というのは普段は家の外に打ち捨てられており、ヤギなどの家畜が食べていることが多いです。外に放置されている酒粕であれば、特に家人に断りなく持って行ってもよいとされており、貧しい人たちがそれらを得ていることも黙認されてきました。しかし、アヨッドでは国内避難民が流入したことによって酒粕の価値が高騰し、ただではなかなか手に入らなくなってしまいました。ここで新たな困難に直面したのは、それまでこの地で酒粕を主食としてきた次のような人々です。

〔事例３　地元の寡婦〕

地元の寡婦Ｎｒさんは、国内避難民の調査ばかりするわたしに、どうして自分たち地元民の調査をしないのかと文句を言いに来ました。Ｎｒさんは次のように言いました。

「ロウ（国内避難民）のせいでこれまで自分たちがもらっていた酒粕が（アヨッドから）なくなった。ロウは家族で（アヨッドに）来る。だから男たちが木を集めている間、女たちは食糧を集めている。それからその木を売って現金を得て、酒粕と交換している。わたしには子供たちしかいない。だから自分たちの食糧を集めるだけで一日全部使ってしまう。」

実際、彼女の世帯のフードダイアリーを見ると、酒粕を得ているのは一週間のうち二日程度で、一切食糧を得ていない日もありました。わたしが調査した範囲のなかでは、どの国内避難民の世帯よりも食糧を得ていなかったのが、Ｎｒさんをはじめとする地元の寡婦の世帯でした。

〔事例４　地元住民の不満と井戸の使用制限〕

地元住民の不満が募る中、国内避難民をめぐる状況も悪化していきました。地元住民からしたら、国内避難民は親族間の紐帯を利用して「豊か」な暮らしをしているように見えます。また支援はないといっても、定期的にＮＧＯなどが見回りに来ており、まだ支援される可能性があることを人々は知っています。

地元住民の困窮を受け、一部の人々はそれまで国内避難民と共有していた井戸を、国内避難民が使用することを禁止してしまいました。結果として、国内避難民は汚水を水たまりから組んできて生活水とせざるを得ませんでした。

この状況をうけ、当時ＮＧＯらによってキャンプに井戸

の設置が検討されていましたが、同時に地元自治体ではキャンプの撤去を検討している段階でした。井戸が設置されれば、さらに避難民が集まることが予測され、同じ状況が再生産される可能性があるかと思います。

以上みてきたように、キャンプの設置と地元住民、国内避難民の困窮は循環関係にある可能性が指摘できます。つまり、キャンプが設置されることで避難民が押し寄せ、それによって、従来この地域が相互扶助で支えることができた範疇を超えて人口が増えてしまい、地元住民が困窮し、結果として相互扶助関係にあった国内避難民も困窮してしまうという状況が生まれていたということです。

別稿［橋本　二〇一九a］で論じた通り、国内避難民キャンプでは自治組織が発達していまして、その構造は、植民地期以降に南スーダンの村落部に根付いてきた首長制と、父系の出自集団およびそれをまとめる集団が接合されるかたちとなっていました。出自集団をはじめとする親族・姻族のつながりが相互扶助の中心となっていたことはすでに見た通りです。しかしその相互扶助は、従来その地にあった地元住民同士の相互扶助を破壊するものでもありました。

この地には、古くからロウ・ヌエルとガーワル・ヌエルが築いてきた相互扶助関係がありました。しかしこの関係も、内戦以降の偏った支援により崩壊または機能不全に陥ったと言われています。実際にそれが事実であったのかは定かではありませんが、わたし自身のアヨッドでの経験を振り返ると、その一端を見た気もします。「ハゲワシと少女」に写っていた「少女」は、食糧を求めにやってきた避難民であったかもしれませんが、地元住民であっても不思議ではない状況であったのが想像できるのです。

国内避難民キャンプはまさに、「ものごとの国家的秩序」に対する想像力と、人々のミクロな相互扶助、秩序構築が衝突していた場所でした。支援を期待して集まった人々は、結局は親族集団同士の相互扶助に依拠せざるを得ず、それによってあぶれた人々は、国際社会が想定する支援の対象外とされたのでした。

4　難民の相互扶助と自治組織

後半では、ウガンダの難民についてみていきます。ウガンダはアフリカでも多く難民を受け入れている国で、南スーダン難民も多く暮らしています。しかし、ウガンダも、もともとそこまで豊かな国ではありません。通常難民は自国への帰還が望まれますが、ウガンダでは、難民と地元住民との統合が目指されています。ではウガンダでどのよう

な実践が行われていたのかを紹介します。

難民定住区には、国家間関係、民族間関係、民族内の集団間関係、親族関係など様々なレベルの社会関係が集積しています。難民居住区では、ヌエルの人々は、祖国で「敵」である人々とも共に暮らさなければならなくなりました。もちろん、ここでもたびたび衝突は起こります。なかなか国連やウガンダ警察が介入できない民族集団間、あるいは民族集団内部の問題を解決するのが次に取り上げる自治組織です。

ヌエルコミュニティリーダーズ（Nuer Community Leaders、以下ＮＣＬ）というヌエルの自治組織は、定住区内で生じるさまざまな問題に対応します。多くのヌエルは反政府軍側についており、人々にとって、ウガンダは「敵国」でもあります。人々はウガンダ警察を信用せず、なるべくなら問題を自分たちの話し合いや慣習法を通じて解決したいと考えていました。また、通常であれば当事者同士で解決する小規模な問題、例えば離婚調停や予期せぬ妊娠など、ヌエルではそれぞれの集団によって解決方法や賠償額が異なることもあり、必ずＮＣＬが介在して事態を収拾しようとします。ほか、ＮＣＬは新しい難民が到着した際の居住区の割り振りを行ったり、葬儀講など社会保障機構としても機能したりします。

この組織は、さきに言及した国内避難民の組織と似た構造をしています［橋本 二〇一九b］。まず、リーダーとその周辺には、書記、会計、「省」といった、近代国民国家の行政システムと同様の役職が設置されています。近代的な行政システムのほかには、ヌエルの下位集団[3]の代表者が名前を連ねています。すでに述べたように、ヌエルは分節化した社会構造を持つ民族集団で、分離と融合、敵対関係と同盟関係が常に生じており、民族集団としての政治的統合性に欠けています。下位集団も一つの集団として統合されているわけではなく、ＮＣＬを構成する下位集団の代表もまた、自身が代表を務める集団には書記や会計、「省」などを設置していました。つまり、ＮＣＬが運用する近代的行政システムは、ヌエルの従来の集団形成の方法の中に埋め込まれていることが指摘できます。このように、新たな行政システムと旧来型の集団間関係の接合によって、難民たちのローカルな秩序は保たれていました。

ＮＣＬが解決する代表的問題の一つが、難民定住区内の民族間関係とかかわるものです。例えば、ＮＣＬのリーダーたちは、小学校で行われるサッカーの試合などで民族集団別のチーム編成をしないよう、ウガンダ出身の教員に働きかけています。これにより、子どもたちに「民族が異なるから対立する」という誤った理解を引き受けないよう注

意を促そうとしているのです。しかし、ＮＣＬは民族対立を回避しようとする一方、次の事例からわかるように、ヌエルを一つの民族として再生しようと試みてもいました。

〔事例５　難民による問題解決〕

ある日、ＮＣＬはヌエルの少年たちのけんかをめぐって法廷を開きました。法廷はおよそ三日間開催されました。ＮＣＬのリーダーや各種役職にある者たちは、けんかの当事者となった少年二名およびその周辺にいた少年少女の前で、ヌエル同士の小さいけんかであっても、それがいつか大規模な「政府の戦争」となり、それによって今自分たちが苦しんでいるのだということを繰り返し説明しました。当事者の少年は互いに怪我をしていましたが、難民たちは賠償のためのウシまたは現金を持っていません。ここでは、賠償の支払いの代わりに、当事者に鞭打ちを行うことで解決となりました。三日間のうち、最も多く聞かれた表現は「ヌエルは一つだ」という表現でした。この発言は、ヌエルは「一つ」であるのだから、対立せずに一つの民族としてまとまるべきだという意図のもとになされました。

しかし裏を返せば、このように言わなければならないほど、ヌエルは現在でも統合性に欠ける集団であるということです。植民地期以降の南スーダンの政治的状況のなかでも、あるいは凄惨な民族対立や民族浄化を経験してもなお、こうした集団間関係のありかたは劇的に変化することはありませんでした。リーダーたちは、ウガンダにおいてヌエルという一つの民族を統合あるいは創出しようとしていたのです。これを象徴的に示すのが、次に紹介する神話を用いた共同体の創造です。

〔事例６　神話に基づく共同体の創造〕

ＮＣＬのリーダーたちが決まって集まる場所は、一本の大きなマンゴーの木の下です。難民定住区に暮らすヌエルの人々は、困ったことがあるとこの木の下にいるメンバーたちに相談事を持ちかけます。難民定住区では、人々はこの木を「サールジアスリエイ」と呼んでいました。「サールジアスリエイ」とは、ヌエルの起源神話に登場するタマリンドの木のことです。「ヌエルは一本のタマリンドの木からうまれた」という伝承があります。もちろんこうした伝承は地域によっては様々なかたちで語り継がれており、必ずしもすべてのヌエルの人々が同じように神話を知り、理解しているわけではありません。かつて、この神話は、例えば「ディンカの始祖、白人を含むすべての人間がタマリンドの木から生まれた」[Crazzolara 1953, pp.66-67 強調点は引用者]、「ジカニィをのぞく全てのヌエルがタマ

リンドの木から生まれた」[Johnson 1994, p.45] のように、タマリンドの木からうまれた者はヌエルに限らず、またすべてのヌエルでもありませんでした。

しかし、この定住区で採用されたのは、「すべてのヌエルはサールジアスリエイから生まれた」というヴァージョンの神話でした。この木は、ＮＣＬのリーダーたちによって作成された「憲章」や、Facebook 上のアイコンにも登場します。始祖の木の下で問題を語り合い、解決することは、（創造された）神話的過去に回帰して、集団の統合性を創り出すことにつながります。この神話の創造はすなわち、植民地期に境界が設定された、固定的で閉鎖的な「民族」のイメージを強化しうるものであり、「想像の共同体」[アンダーソン 一九九七] が、草の根のレベルで作られている過程なのではないかと思います。

5　おわりに

今回取り上げた国内避難民キャンプ、難民定住区はどちらも国民国家の成立以降、人工的に作られた生活区域でした。こうした場所では「ものごとの国家的秩序」に呼応するかのように、人々の想像力がはぐくまれていました。国内避難民キャンプでは、人道支援への期待から地元住民と国内避難民とのあいだで分断が生じていました。難民定住区では、植民地期以来権力者によって操作されてきた、均質的で閉鎖的な民族の姿が、神話を通じて再生産されていました。しかしながら、避難民のコミュニティで見えてきたのは、こうした問題もはらみつつも、複数の秩序の様式――近代行政システム、出自集団、（創造された）神話的秩序――が接合されながら、ハイブリッドな秩序を形成しているということでした。ここからは、人々は「ものごとの国家的秩序」の視点を取り入れつつも、それと距離を取ろうとする力学が常に働いているということがわかります。

最後に、これまで人権について直接論じてこなかったので、関連する問いを置いていこうと思います。アフリカの地域人権宣言に、「バンジュール憲章[4]」というのがあり、この特徴の一つは、「個人の義務」としての「家族、社会、共同体」の尊重が挙げられていることです。親族共同体が、いかに現実においても精神的にも人々の生命と深く関わってきうるかというのは、発表で見た通りです。

しかし、例えばわたしたちの社会でもそうですが、「世間」という言葉の前に「個人の人権」というものが脆くも崩れ去ることから想像がつくように、しばしば集団としての秩序と個人の権利は競合し、矛盾します。このような矛盾は、特に大きな国際社会が抱える理念が、現実において

実践されるときにはじめて見えてくるものではないかと思います。

人権について考えるときにキーとなるのは、人権の概念のベースとなる人間観にある気がするのです。ヌエルには、「双子は人間というよりも鳥である」という人間観があるのですが[Evans-Pritchard 1956]、これを現代の社会で支配的な人権、人間観は許容できるのでしょうか。こうした人間―環境融即型の人間（人権）観は、かつて人類学が対象としてきた小規模な民族社会において多く報告されてきました。このような見方は非科学的で人類学者だけが扱うユニークな世界観でしかなかったのですが、人間中心主義からの脱却や、自然環境との共生が叫ばれている今、こうした人間観を、取るに足らないでたらめな世界観とし一笑に付すことは、果たして適切な態度なのだろうか、というようにも思います。

今回の発表で取り上げたのは、西欧とアフリカあるいはそれ以外の社会が前提としてきた人間像や秩序に対する想定がせめぎ合う場でした。矛盾しかねない理念が理念として掲げられているときに、そのとん挫を予測してあきらめてしまうのではなく、理念をケースバイケースで捻じ曲げたり接合させたりという現地の人たちの知恵から、わたしたちはまだ学ぶことがあるのではないでしょうか。

参考文献

アンダーソン、ベネディクト
一九九七　『想像の共同体――ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、ＮＴＴ出版。

橋本栄莉
二〇一九ａ　「強制移動民が形成する自治組織の比較分析――南スーダン、ヌエル人の国内避難民および難民を事例として」『難民研究ジャーナル』第八巻、一一四―一二七頁。

橋本栄莉
二〇一九ｂ　「難民の実践にみる境界と付き合う方法：ウガンダに暮らす南スーダン難民の相互扶助組織を事例として」『質的心理学研究』第一八号、七六―九四頁。

ファーガソン、ジェームズ
二〇二〇　『反政治機械：レソトにおける「開発」・脱政治化・官僚支配』石原美奈子ほか訳、水声社。

Crazzolara, Joseph P.
1953　*Zur Gesellschaft und Religion der Nueer.* Wien-Mödling, Missionsdruckerei St. Gabriel.

Evans-Pritchard, Edward E.
1940　*The Nuer: A Description of the Modes of*

Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People, Oxford, Oxford University Press.

Evans-Pritchard, Edward E.
1956 *Nuer Religion*, Oxford, Oxford University Press.

Johnson, Douglas H.
1994 *Nuer Prophets: A History of Prophecy from the Upper Nile in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, Oxford, Oxford University Press.

Malkki, Liisa
1995 *Purity and Exile: Violence, Memory, and National Cosmology among Hutu Refugees in Tanzania*, Chicago, University of Chicago Press.

Tsing, Anna
2017 "A Threat to Holocene Resurgence Is a Threat to Livability," In Brightman, M. and J. Lewis (eds.) *The Anthropology of Sustainability: Beyond Development and Progress*, London, Palgrave Macmillan, pp. 51-65.

註

（1）一九九三年、南アフリカの写真家ケビン・カーターによって撮影された。原題は The vulture and the little girl. 一九九四年にピューリッツァー賞受賞。

（2）野生のナツメヤシは実をそのまま食べることもできるが、次のようにさまざまな調理法が存在する。①実を煮てジャムのようにする、②皮ごとしばらく水につけて置き、皮を柔らかくして食べる、③皮を浸した水を飲む、④種に土をまぶして乾燥させ、種の中の核の部分を食べる。③はマラリア治療薬にもなる。また④は、とり出す段階によって粉末状になったり固形状になったりする。粉末状のものは高血圧の薬としても使用される。国内避難民は粉末状のものを塩代わりに使っていた。

（3）ヌエルには西ヌエル、ロウ・ヌエル、ラック・ヌエル、東ジカニィ・ヌエルの四つの下位集団が存在する。

（4）一九八一年六月、アフリカ統一機構により採択された「人及び人民の権利に関するアフリカ憲章」、「アフリカ人権憲章」とも記載される。

（本学文学部准教授）